

題になつて「巡査なんてかわいそうな者だ」と云ふのが始まりで、時事問題やら養蠶がドウのと滔々數萬言を吐く辯士が居た、車中の人は皆其方へ耳を傾けて謹聽した。眠氣覺しに面白かつた。『小山』のらなき飯もうまく食べて『上野』に着いたのは十時過ぎであつた。電車に乗つてから、あたりが明るいので何だか羞かしい様な氣持がした、どの人の顔も皆生き／＼した色をしてる、僕は自分が時代後れになつた様に感じた。

『東京』へ着いて人間の多いのに驚いた、電車は満員、折角『日光』でとつて來た車百合の花を損ふまいとの心配は一通りではなかつた、十一日目で吾家へ歸つて、草鞋をとき湯に入り、さて居間の座布團の上に腰を下したが、何だか半年も旅行してゐたかのやうに感ぜられた。(鷗) (終)

尾 瀨 拾 遺

△尾瀨附近に七月頃咲いてゐる花は、ミヤマリンドウ、ゴゼンタチバナ、チンクルマ、イハカヅミ、キヌガサソウ、カンゾーヤマト、ヂ、ミヤマアヤメ、ヒメシヤクナギ等が主なるもので其他はいろいろあるが名を知らぬ、何れも高潔で美しいものばかり。

△植物としては武田氏の記載によれば、リヤウヅ、ハウチハカヘデ、トチノキ、ウリノキ、イボタ、マンサク、ハギ、ス、キ、ワラビ、ギバウシ、カラマツ、ミヅナラ、オホカメノキ、コバノトネリコ、ムラサキツリバナ、モミヂ、ハリギリ、ツノハシ

バミ、ネマガリダケ、ヅナ、シラカシバ、キハダ、ナナカマド、アラタゴ、ノリウツギ、ネコシデ、等を挙げられたり、吾等の見たるものとして此ほかに五葉の松、ツガ等ありき。

△一行のうちの植物學者は八木君なり。

△八木君で思ひ出せしが、入口で小用をした夜、幽靈話あり八木君ユールンとお里言葉を出して一同大笑ひ。

△一行のうちの某君曰く「若し先生が居なければこの小屋の中で小便をしかねない」と。

△一行のアシヨールになつたると推して知るべし、手拭をぬらして乾かすのが面倒なために、臭くなつても洗はぬ人あり、土足のまゝ床に上つて夜は勿論その上へ寝るなり。

△紙屑を捨てるのにも、唾液を吐くにも、室内で寝ながら用が足りる、こんな便利な家は他にあるまい。

△食事の時テーブルとなるのはイツモ寫生箱なり、此箱の上へ、醬油もこぼれるし、飯もこぼれる、茶もこぼれる、濟んだ跡は匏屑で拭いて置く。

△鍋、茶碗の類は戸倉から持參せしもの。

△戸倉に鶏卵はない、沼田から一つ五錢も出して買つて置ても、十のうちの五つは腐つてゐるといふ始末。

△戸倉の馬の駄賃一日金貳圓也。

△草鞋は戸倉で用意すべく、一日一足位ひは入用と心得べきなり。